

ハワイ先住民の固有の伝統舞踊であるフラに関する 研究における、米国カリフォルニア州の位置づけ

軽部紀子

はじめに

本稿は、筆者の博士論文にかかる研究の一部である。博士論文では、ハワイ先住民⁽¹⁾の伝統舞踊であるフラ (*hula*⁽²⁾) の「真正性 (authenticity)」を明らかにする。研究調査は、まずフラの「神聖性 (sacredness)」に焦点を当て、米国ハワイ州ハワイ島でおこなう。次に、その調査から抽出された概念を基盤に、カリフォルニア州で本調査を行う。そして、両地域での調査データから、フラの起源であると考えられている「神聖なフラ」を神聖であると決定づける存在の、歴史的、文化的、そして環境的な要因による変化を追い、それらがどのようにフラの真正性の形成と関係しているのかについて論じ、さらには文化にまつわる正統性の議論へと発展させていく。

本稿では、上記構成の中でも、カリフォルニア州における調査の導入部分として、カリフォルニア州が歴史的にハワイ先住民と縁の深い関係にあるという側面に注目する。Nihipali [2012] によると、第二次世界大戦後に多くのハワイ先住民が、より住みやすい環境や仕事を求めてカリフォルニア州に移住した。彼らの多くはサンフランシスコ、ロサンゼルス、サンディエゴといったカリフォルニア州の地域にコミュニティを作っていた。2015年度の最新の米国国勢調査のデータによると、「ハワイ先住民及びその他の太平洋諸島民 (Native Hawaiians and other Pacific Islanders)」のカテゴリに自らの帰属性を選択している人口は、ハワイ州全体の358,951人に対し、カリフォルニア州でもほぼ同数の320,036人を記録している [Online United States Census Bureau]。

カリフォルニアは、ハワイにとって最も近隣の州である、という物理的な距離の近さだけではなく、歴史的にも、文化的にも、ハワイ先住民文化とは近い関係にあった。その一つとして、カリフォルニア州は、ハワイと同様に、1850年にアメリカの第31番目の州としてアメリカ合衆国に吸収された歴史を持っている。当時、そこにはカリフォルニア先住民が居住していたが、ゴールドラッシュの影響もあり、過激な土地の奪取が行われ、カリフォルニア先住民を対象としたジェノサイドが行われた。また、当時のカリフォルニアにおける植民者たちがハワイから連れてきた先住民を「Kanaka Colonies (先住民の植民者)」と呼び、使用人として使っていたという記録があることから [Kauanui 2007: 142]、19世紀の早い段階からカリフォルニアとハワイの間

で人の移動やコミュニケーションが行われていたことがわかる。

しかし、ひとたび学術の領域に視線を移すと、ハワイ先住民文化やフラをめぐる議論の中で、カリフォルニアで繁栄するハワイ先住民文化が、ハワイにおけるそれと同様に扱われていないという現状に気付く。本稿では、こういったハワイ先住民文化をめぐる議論の現状の枠組みを打破し、新しい議論の展開の可能性へと道を開く一策として、ハワイ先住民文化の中でも、特にフラに関する研究における、カリフォルニア州の位置づけを考察する。そして、その位置づけの背景を探り、問題点、今後の課題を提示することを目的とする。なお、本稿が基づくデータは、フラを中心とした先行研究に加え、筆者が現在取り組む博士論文の執筆を目的とした研究調査から得られたものである。

ハワイの王族が愛したカリフォルニア

Honi ana i ke anu i ka mea hu'ihu'i

(冷たい新鮮な空気が香る)

Hu'i hewa i ka 'ili i ka ua Po'aihala

(*Po'aihala* の雨が肌寒い)

Lei ana i ka mokihana i ka wewehe o Kaiona

(*Kaiona* の *Mokihana* を身にまとい)

Lihau pue i ke anu hau'oki o Kaleponi

(彼女はカリフォルニアの寒さに身を震わせる)

(「*He Inoa No Pauahi*」 by Queen Lili'uokalani より⁽³⁾)

本歌は、ハワイ先住民の未来のために、主に教育の分野を通じて没後の今もなお貢献し続けているバーニス・パウアヒ・パキ・ビショップ (Bernice Pauahi Pāki Bishop, 1831-1884) を讃えるために作られた詠唱、「*He Inoa No Pauahi*」の第一節である。ハワイ王朝最後の王位に就いたリリウオカラニ女王 (Queen Lili'uokalani, 1838-1917) によって作曲されたこの曲は、パウアヒの意思に基づいて創設された、ハワイ先住民の子供たちのための教育機関である、カメハメハ・スクール (Kamehameha Schools) の子供たちを始めとして、世代を超えて、「伝統的」なフラのレパトリーの一つとして愛されている [online Nupepa]。ハワイ先住民の「存続」において多大なる貢献をしたパウアヒを讃えるこの歌の歌詞からは、当時のハワイの王族にとって、カリフォルニアが未知の場所ではなく、具体的なイメージと経験を伴った場所であることがうかがえる。

19世紀後半、当時盛んであったサトウキビプランテーション産業の影響もあり、オアフ島パール・ハーバーとカリフォルニア州北部 (サンフランシスコ、オークランド) を結ぶ定期船便が多く運行されるようになっていた [Nihipali 2012: 8]。物資の動きは人の流れも生み、多くの人が

ハワイに訪れるようになると同時に、ハワイからも人が流出、移動することになった。リリウオカラニ女王の手記 [Lili'uokalani [1898] 2014] からは、カメハメハ王家を始めとするハワイ王朝の王族の多くが、ハワイを出て、世界を知る旅に出ていることがよくわかる。その際、サンフランシスコやオークランドといったカリフォルニア州北部の港町が、彼らにとって、「世界への最初の扉」となっていた。

パウアヒは、19世紀初頭にハワイ諸島を初めて統一したカメハメハ一世 (Kamehameha The Great, 1758-1819) のひ孫であり、カメハメハ王家の血筋を引く最後の直系の子孫であった。1778年のキャプテン・クック (Captain James Cook, 1728-1779) のハワイ諸島「発見」の後、1820年のアメリカ宣教師団の来島を受け、パウアヒが生きた時代のハワイは、西洋文化の影響を強烈に受けながら変化を遂げている最中であった。王位敬称を拒絶し、親の反対を押し切りアメリカからきた実業家のチャールズ・リード・ビショップ (Charles Reed Bishop, 1822-1915) と結婚したパウアヒは、意志が強く、知的な女性であったという [Online Kamehameha School: About Pauahi]。

生涯子供に恵まれなかったパウアヒは、外来の病原菌等の要因によって激減するハワイ先住民の急激な人口変化を前に、継承した莫大なカメハメハ王家の資産をハワイ先住民の子供たちの未来へと託す遺書を残し、1884年10月に他界した [Online Kamehameha Schools: Pauahi's Will]。

パウアヒは他のハワイ王朝の王族と同様に、ハワイ諸島の外へと興味を持ち、夫のチャールズとヨーロッパ周遊などに出かけている。また、後年病に倒れた際には、治療の希望を胸にカリフォルニア州サンフランシスコに単身渡っている [Lili'uokalani [1898] 2014: 108]。その折々、彼女は手記を残しているが、パウアヒの死後に夫のチャールズが居住をサンフランシスコに移した後に起きた1906年のサンフランシスコ大地震の大火事により、残念なことに手記や写真などパウアヒの遺品は多くが焼失してしまった [Online Esoteric]。しかし、パウアヒを讃える詠唱の最初にカリフォルニアが出てくることから、ハワイ先住民の将来を強く危惧していた彼女の生涯において、カリフォルニアがある種重要な存在であったことがうかがえる。

ハワイから見るカリフォルニア

フラに関する著書や論文の中には、フラが繁栄する場所としてカリフォルニアが言及されることは少ない。その代わりに、カリフォルニア州が物理的に北アメリカ大陸の一部を成しているためか、フラに関係のない文脈で、地理的にハワイに一番近い州として、アメリカ本土とハワイを比較するときのアメリカ本土の代表の様に地名が使われたり、また、かつてのハワイ王朝の王族の旅先として地名が登場することがほとんどである。

ナショナリストの立場を貫く Haunani-Kay Trask の著書や論文は、一貫してアメリカの植民活動や同化政策を批判し、その影響が今もなおハワイ先住民を苦しめている、という論を展開す

る。現在、ハワイは世界を代表する観光地になっている。スラックギターの麻酔の様な音色に、波の音、夕日の色、ココナッツの香りを想像すれば、そこは紛れもなく天国のような楽園に感じられる。しかし、現状は異なる。Traskの過激なアメリカ批判、過去の同化政策批判も、これまでの現地での調査での経験を振り返ると、決して大げさな主張とは筆者には映らない。実際に多くの時間をハワイで過ごしていると、今現在もハワイ先住民の生活は様々なポリティクスの狭間で苦しめられていることがわかる。

Trask [1999] は、観光業の目玉として世界中で「消費」されるようになった現在のフラからは神聖さが失われ、フラ実践者はただの「娼婦」のように色気を売るようになってしまったと嘆く。痛切なハワイ先住民文化への「想い」を込めた著書の中で、カリフォルニアが言及されるのは、観光業が盛んな土地、ハワイまで飛行機で5時間のアメリカ本土、そしてかつての王族の旅先としてだけである。ハワイ先住民文化を維持継承するカリフォルニア居住の同胞の様子は描かれることがない。Adria L. Imada も同様に、フラに関する著書、論文の中では、カリフォルニアは20世紀初頭にあったアメリカ本土へのフラの巡業の目的地の一つ、としか描かれていない [Imada 2004, 2011, 2012]。

現在のフラ研究の中で、フラに直接的に関係する文脈の中でカリフォルニアが言及されるのは、「本場（ハワイ）ではないのにフラが享受されている場所」の一例としてあげられることが多い。Amy Ku'uleialoha Stillman は、主にエスノミュージコロジーの分野から、フラに関する幅広い研究に柔軟な視野を与える議論を展開している。Stillmanの柔軟な視点は、Traskなど多くの保守的な研究者と異なり、フラの商業化、エンターテインメント化について、マイナスの要素だけではなく、ハワイ先住民文化にとっての良い影響力を模索する。そのひとつとして、Stillman [1996] は、カリフォルニア、日本などを例にあげ、世界中で進むフラのイベント化、コンペティション化は、えてして「伝統を変えている」という批判を受けるが、変化するのが文化の前提であることを考えた時、むしろフラが消費され衰退していくという視点ではなく、時代の変化に適応している姿なのだ、という視点を持つことの試みを提示している。

この試みは大変興味深いと同時に、しかし、イベント活動だけをくり抜き、フラの繁栄の尺度としてしまうことは、フラを生活の一部として行っている実践者たちの存在を見落としていると言える。実際、カリフォルニアには、イベントへの参加を目的にしないフラ・ハーラウ (*hula hālau*)⁽⁴⁾も数多く存在する。そういった実践者たちの活動を鑑みると、カリフォルニア北部のコンペティションには本場ハワイからのハーラウが参加可能だが、南部のコンペティションはアメリカ本土のハーラウしか参加を受け付けないため、ようやく本土のフラダンサーたちもコンペティションで1位をとることができるようになった、と考察してしまうことは、やや尚早だと言える。事実、カリフォルニアのイベントがそのような特色を持っているとしても、実践者たちの姿が見えない論からは、図らずともカリフォルニアのフラが「本場ハワイ」のフラに劣等感を覚

えている、という構図が描き出されてしまう。

ハワイ先住民の文化復興運動に向けられた批判

カリフォルニアはハワイと親密な関係にありつつも、なぜ、多く存在する伝統的なフラ実践者たちの熱心な営みは雲に隠され、アメリカ本土の一部として、今もなお植民者の一部に含まれたような文脈で登場してしまうのか。これには、ハワイ先住民文化の復興に伴って生じた、ハワイ先住民の民族意識を「逆差別」として批判する研究者たちの存在が大きく影響していると言える。

1970年代以降に加速したハワイ先住民の文化復興運動（ハワイアン・ルネッサンス）は、ニュージーランド先住民や他のポリネシア諸島の文化実践者による助けもあり、多くの伝統文化の復興に成功の兆しを見せている。その中でも、Herman RDK [1999]によると、言語復興の持つ意味が非常に大きい。興味深い議論として、先住民の文化復興、権利回復の一環として、道路の名前を征服者の言語であった英語名からハワイ語名に変更していく動きが強まる中で、移民やその子孫など、「ローカル」という意識を持った非ハワイ先住民からは、「我々もハワイの住人である」「我々の文化もハワイの一部である」という反意が強まり、ハワイ先住民の文化復興の意識は、むしろ「人種差別的」だと批判する意見が出ているという [Herman 1999: 94]。

このようなハワイにおける「人種差別」や「逆差別」については、Rohrer [2010] のように、自らの経験を基にしてどのようにハワイで「ハオレ (*Haole*)」が差別を受けているかを論じる者もいる。ハオレとは、ハワイ語ではもともと、英語の「foreign」にあたる、「外国の」「外の」といった意味を持っていた。しかし、時の経過とともに、ハワイ先住民にとって、彼らの文化を「侵略」した一番の「よそ者」として、「白人 (Whites)」を指す語となった。

また、ハワイ先住民の文化復興運動そのものを、「伝統の創造 (invention of tradition)」と批判する研究者も存在する。Roger M. Keesing がその一人である。伝統文化の復興運動が試みられている文化には、Hobsbawm [1983] 以降、ハワイ先住民文化に限らず、伝統の創造という議論がつかまとう。1989年、多くのハワイ先住民がコミュニティ内の活動を軸に、先住民文化の復興、民族意識の再認識に力を注ぐ中で、Keesing は論文、“Creating the Past: Custom and Identity in the Contemporary Pacific” [Keesing 1989] の中で、ハワイを含めた太平洋諸島民を「Pacific peoples are creating pasts, myths of ancestral ways of life that serve as powerful political symbols.」と言い、Trask の怒りを買った。Keesing はフラを観光業のために過去を再創造した踊りとし、「ハワイの文化」とカッコ書きをした [Keesing 1989: 32]。これを受け、Trask は Keesing の批判を開始し、1991年には互いを痛烈に批判し合う論文を同時に同じ学術誌に発表するなど、論文上での直接的な論争が見られた。

このような直接的な論争は珍しいにしろ、学術上での静かなハワイ先住民の文化復興運動に対する批判は Linnekin [1983] や竹村 [2002, 2004] に見られるように明らかに存在しており、また、

Rohrer [2010] のように、そういった運動の「弊害」として誕生したとされる、ハワイで生まれ育ったハワイ先住民以外のアイデンティティ・クライシスやアイデンティティ・ディアスポラに関する研究によって、軌道に乗ったハワイ先住民の文化復興運動を問題視する傾向もある。こういった「かつての植民者たち」からの再びの圧力や文化批判を受け、ハワイ先住民を中心とした研究者たちの中には、このような圧力を「neocolonialism」や「academic colonialism」と叫ぶ者もいる。

さらに、このような張りつめたアカデミアの現状に水を差すような研究者も姿を見せる。2013年に博士号請求論文として提出され、受理された Hong による博士論文は、経済的困難、教育的困難、健康被害など、ハワイ先住民をめぐる現在の「不遇」な社会問題は、違法な王朝転覆など、凄惨なハワイの歴史に向き合う事なく、過ちを犯した植民者たちを許すことが出来ないハワイ先住民にすべて原因があると論じる。さらに、彼女は、数か月間のオアフ島での調査に基づいた「文化人類学的」な分析により、ハワイ先住民は自らの歴史をまったく知らず、そのため、彼らにはアイデンティティがなく、自分たちが誰なのかがまずわかっていない、と批判する。そして、彼らの未来のためには、まず、彼らが歴史を勉強し、自分たちがどこからきた誰なのかを認識する事により、ハワイ先住民文化の美しさを学び、そしてそれを侵害した相手を許すことにより、ようやくハワイ先住民、ひいてはハワイには未来がやって来る、と言う。そして、そのためには、フラ・カヒコ (*hula kahiko*)⁽⁵⁾を学校教育のプログラムに組み込むなど、フラ・カヒコを通じた勉強をハワイ先住民にさせるべきだ、と結論付ける。この論文はフラに関する理解やハワイの歴史認識が著しく貧弱であるだけでなく、根本的な論文の書き方、そして文化人類学的では一切ない調査の方法に基づいた論文であるにもかかわらず、正式に博士号が授与された論文となっている。2015年に出版された *Hawaiian Journal of History* では、Mattos によって新しいハワイ研究の一つとして文献リストに含まれている。

当該論文に関しては、その分量は相当なものになると思われるが、今一度別の場所において詳細に検証するとして、この場では、残念なことに University of San Francisco という、ハワイ先住民が多く居住する地域に存在する大学から博士号が付与されていることに目を向けたい。アメリカ本土の中では、歴史的な交流からも、また、ハワイ先住民の人口の多さからも、比較的カリフォルニアにはハワイ先住民文化への理解があり、ハワイとの距離が近い場所のように希望が持たれる。特に、教育機関においては、より一層真摯な姿勢が望まれる。しかし、このような実情を鑑みると、ハワイ先住民による文化的な実践は学問の領域からはまだ認識されておらず、さらに、Hong の博士論文のような未熟な研究や解釈が権力を持ってハワイ先住民や彼らの文化、文化活動を評価、批判し、社会に影響を与えていくという事は、大残念な事である。そして、そういった堂々とした姿は、ハワイ先住民の目にはかつてハワイを植民地化したハオレの姿に違なく映り、それに立ち向かう研究者たちの議論が、「ハワイ性」を強調し、他者を排除し、より純

粹なハワイを描く傾向に陥ることは腑に落ちる流れである。そして、不幸にも、そういった流れの中では、アメリカ本土の一部であるカリフォルニアに渡ったハワイ先住民や彼らの文化活動は、ひとまず言及しないにこしたことはないという扱いを受けているのではないか。

ハワイとカリフォルニアの距離

以上の事から、本稿では、ここまでに以下の3つの点を明らかにした。

1. カリフォルニアが歴史的にハワイと密接な関係にあること
2. しかし、フラに関する研究の中では「本場」とは差異化して扱われていること
3. 2の要因として、ハワイ先住民文化や歴史を理解していない研究者、もしくは「academic colonialism」といった思想を持った研究者によるアカデミアでの圧力に対する反発として、ナショナリスト的な色合いが強まった議論がハワイ先住民の研究者から湧き上がるような展開があること

柔軟な視点をもったフラ研究者である Stillman は、カリフォルニアとハワイの距離を縮めるような可能性を示唆する。フラのグローバル化についての論 [1999] の中で、“Global flows of people, capital and ideas in the late 20th century have challenged scholars of culture to acknowledge that cultural practices do not remain anchored to either places or peoples of origin.” と冒頭に述べ、ハワイ以外の土地で特にフラが享受されている場所として、カリフォルニア、日本、ヨーロッパ、メキシコ、インディアナポリス（インディアナ州）を事例に、その諸相を簡潔にまとめている。その中で、カリフォルニアはハワイに次いで圧倒的にハワイ先住民の人口が多いため、フラの在り方が他の地域とは異なり、実践者の民族意識に直接的に関係する文化活動としてのフラの様子が言及されている。また、そういった活動を支える他の地域との相違点として、クム・フラ (*kumu hula*)⁽⁶⁾の指導者としての役割の重さが挙げられている。

「アメリカ本土」という、環境がハワイではない場所でハワイの文化活動を行う際、時に、まず、「ハワイとはなにか」という、少し遠回りした概要から肝心な活動にたどり着く必要がある。ハワイのクム・フラがハワイ先住民文化の中でもフラに特化した専門家であるならば、カリフォルニアのクム・フラは、ハワイ先住民文化に特化した総合的な専門家である必要がある。それは、フラに関する様々な関連知識が必要になった際、ハワイならば、すぐにその専門知識を持った人物を訪ねる事ができるが、カリフォルニアの場合、それが叶わないことがある。また、フラは島や地域によって異なった特色を持つため、あるチャント（詠唱）や曲を勉強する際、その土地の歴史や事情に関する豊富な知識も一人のクム・フラに求められる。

実際、筆者の過去の調査でも、南サンフランシスコを拠点に伝統的なフラに従事するクム・フ

ラの語りの中で、アメリカという環境でハワイ先住民文化を行う事に様々な規制が伴っているという苦悩が語られた〔軽部 2015〕⁽⁷⁾。その例として、本来伝統的な儀礼としてはフラを習うハーラウに入る前に、建物の外である種のチャントを唱えてから入場しなければならないところ、ハワイ先住民文化に理解の無い、もしくは薄い近隣住民の存在を考慮した時、彼らが理解できないハワイ語で建物の外でチャントを唱える事は、近隣住民に警戒意識を与える事になるため、儀礼を破り、ハーラウに入った後にチャントを唱えているという。こういった、周囲の文化的な環境に適応した変化が、「本場」の実践者たちの目には、「儀礼を知らない」と映る事がある。こういったハワイのフラ実践者たちが指摘する「本場」以外のフラに関する「誤り」は、筆者はこれまでのカリフォルニアでの調査を通じ、知識不足からくる「誤り」ではなく、むしろ、豊富な知識に基づいた、極めて源泉の儀礼に沿った形での適応の形であると考えている。

そうした点からも、Stillman [1999] が指摘するように、カリフォルニアにおけるクム・フラの役割は、フラの指導者であるだけではなく、総合的なハワイ先住民の文化的指導者、ともいうことができる。現在カリフォルニア州には、北部に“Kumu Hula Association of Northern California”、南部に“Kūlia i ka Pūnāwai”という団体が、それぞれの地域におけるフラに関するイベントや活動を支援している。ハワイよりも、より厳しい環境でハワイ先住民文化を維持継承していくために、このようなハワイアンコミュニティを統括する団体の存在は大きな意味を持ってくる。彼らは、伝統的な知識に基づきながら、アメリカという土地も理解し、フラだけではなく、ハワイ先住民の文化や民族意識を誇り、ただ模倣するだけではなく、環境に適応させて「生きる文化」としてのフラを実践しているのである。

今も昔も、法律、政治、経済、学問、などといった様々な分野から、ハワイ先住民は圧力を感じている。特に、そういった圧力による民族意識の低下、自らの文化の消失の危機を経験してからのこの数十年の文化復興運動の努力に向けられた「逆差別」という批判に対しては、これまで以上の落胆と憤りが生じ、その結果、アメリカ合衆国からの完全独立を願う自治体が多数出現するようになった。また、その憤りや意識の高まりは、フラにとって最も神聖な場所のひとつである、ハワイ島マウナケア山の山頂における超巨大な30メートル望遠鏡（Thirty Meter Telescope, TMT）の建設をめぐる開発問題にも関係している。「もう我慢できない」という現地の建設反対派の意見の、「もう（no more）」という語の背景には、ハワイ先住民文化をめぐる様々な方面からの不理解と圧力の存在がある。このTMT計画は、図らずとも、カリフォルニア工科大学の先導によって完成された。歴史的に縁の深い関係にありながら、カリフォルニアとハワイの距離は、離れていく一方なのか。カリフォルニアは、フラ研究において正面から触れられることのないタブーになってしまうのか。

おわりに

ハワイ先住民の文化復興運動に向けられた「ハオレ」からの不理解や批判は、ハワイ先住民に他者を排除し、「ハオレの国」からの完全独立の意思を固くさせる。その結果、カリフォルニアに繁栄する、ハワイの伝統的な知識と儀礼に則った、ハワイ先住民によるフラの文化は、不幸にも「アメリカ」という大きな敵に吸収され、彼らの同胞への想い、苦悩、努力や実践といったものは、これまであまり学術の場では日の光りを浴びることがなかったといえる。特に、この数年は、ハワイ先住民たちの威信をかけた近年で最も大きな社会問題の一つともいえる、TMT 建設問題により、カリフォルニア州は「ハオレ」の印象を強くしている。

しかし、筆者は、そのカリフォルニア州で行われているフラにこそ、歩み寄る事ができないハワイとカリフォルニアの不可視な距離を縮める可能性があると考えている。カリフォルニア州をフラ研究の対象に含める意義については、フィールドワークに基づいた現地の声を軸に、前出の論文〔軽部 2015〕の中でも述べた。本稿では、さらに先行研究や現在のハワイとカリフォルニアをめぐるアカデミアの問題と社会問題を考察し、カリフォルニアがハワイにとって、いまだに圧力を与える一番身近な「ハオレ」として語られがちな点、そして、同時に、その土地には、ハワイ先住民が「ハオレ」を排除して守ろうとしている文化が息づいている、という点を明るみにし、さらなる研究調査の必要性を提示した。

ハワイと密接な関係にあり、ハワイ先住民文化にとっては自己であり他者であるという複雑な空間に位置付けられているカリフォルニアに、フラ研究の分野からアプローチを試みる事で、より柔軟な解釈が発信され、ハワイとカリフォルニアの距離を縮め、ひいては、ハワイ先住民文化をめぐる困難を現地の目線で解決できるよう、今後もカリフォルニアでのフラの活動に注目をしたい。そして、その「活動」の中に、ぜひ積極的にカリフォルニアにおけるフラの実践者たち自身による、カリフォルニアにおけるフラについての情報発信が含まれることを期待する。また、ハワイ先住民がハワイを出て移り住んだカリフォルニアにはカリフォルニア先住民の文化が存在していたことを念頭に、彼らとのインタラクションも研究対象の一つにし、Stillman [1999] が萌芽を息吹かせるように、人や文化が移動する時代における、文化の変容、文化の適応、そしてそういった文化にまつわる真正性といった概念を生み出す議論を展開していきたい。

最後に、1998年に Stillman が作曲した、カリフォルニアへの想いを込めた歌を紹介したい。オアフ島で生まれ育った Stillman は、その後数年間をカリフォルニア州で過ごしている。その際、現地のハワイ先住民のコミュニティと交流を深くし、特に、前出の“Kūlia i ka Pūnāwai”と懇意にしていた。彼らの活動を通じ、カリフォルニアでのフラの存在を受け止めた Stillman は、かつては「ハオレ」だった土地にも、自らの文化の子供が生まれ、そしてさらにその子供が生まれ、そしてその命は、確かにその土地によって生かされていると考えた。かつて南方諸島からカ

ヌーで渡ってきたポリネシア人がハワイ諸島に居住を構え、世代を超えて文化を築き上げてきたように、カリフォルニアにもまた、ハワイ先住民文化を基盤にした文化が確かに築かれている。

Eia Kaleponi, he 'aina one ula

(ここはカリフォルニア 広大な土地)

He 'aina kipa no na kuipa i 'auana

(さまよいたどり着いた者を受け入れた土地)

He 'aina malu no ka po'e e 'imi i ke ola

(生きる場所を求めた者を受け入れた土地)

He 'aina no ka nohona pumehana

(ぬくもりと癒しを与えた土地)

He 'aina no ka ho'ola i na hanauna

(彼らの命を紡いだ土地)

He 'aina no ka ho'oulu i ka lahui 'oiwi

(ハワイアンコミュニティの成長を支える土地)

He 'aina haole no na kupuna

(私たちの先祖は知らぬ土地)

He 'aina hanau no na pua

(私たちの子供が生れた土地)

He 'aina hau o Kaleponi i ka 'olu, he ola no makou e.

(カリフォルニアは私たちを生かす 平和で守られた土地)

(「*Eia Kaleponi*」 by Amy Ku'uleialoha Stillman⁽⁸¹⁾)

注

- (1) 「ハワイ先住民」をめぐる定義は、法律で定められているものの、当事者の立場や主張によって揺らぎが見えるという複雑性を帯びている。アメリカ合衆国の連邦法では、「the term “Native Hawaiian” means a member or descendant of the aboriginal people who, before 1778, occupied and exercised sovereignty in the area that now comprises the State of Hawaii. [Online OLRC: 20 USC 80q-14 (11)]」と定める一方で、1920年に制定されたHawaiian Homes Commission Actでは、「“Native Hawaiian” means any descendant of not less than one-half part of the blood of the races inhabiting the Hawaiian Islands previous to 1778. [Online DHHL: Title 2, 201]」とし、民族集団の定義に血の分量が持ち込まれている。本稿では、日本語表記で「ハワイ先住民」とする際、上記連邦法の定義の範囲を指すこととする。その根拠としては、これまでに筆者が行ってきたハワイ州及びカリフォルニア州における調査で、「外見ではわからなくても、一滴でもハワイの血 (Hawaiian blood) を持っていれば (ネイティブ) ハワイアン」という価値観が広く現地でも共有されていることが観察されているからである。本稿では紙面の容量の関係で詳細には論じないが、ハワイにおける民族集団や帰属意識は、行政上の概念や現地での概念がそれぞれに存在すると共に、その境界が必ずしも一致しない点から、

Hall [2005]、Kauanui [2004, 2007]、Trask [1993]などを始め、詳細な事例や自身の経験を基にした研究が成されている。

- (2) 本稿では、ハワイ語をイタリックで表記し、スペル等は参考文献にあげる“Hawaiian Dictionary” [Pukui and Elbert 1971]に従うものとする。ただし、引用等の場合にはその都度その旨を付記する。
- (3) ハワイ語の歌詞はKamehameha Schools HPより引用、日本語はHP上で併記されている英語訳を筆者が日本語訳した。
- (4) ハワイ語で「フラの学校」の意。
- (5) 一般的に、19世紀後半を起点として、宣教師を中心とした西洋文化からの圧力によって弾圧される前のフラのスタイルを指す。「古いフラ」の意。これに対し、西洋文化の影響を受けたフラを、フラ・アウアナ (hula ‘auana) といい、「モダンなフラ」と解釈されている。
- (6) ハワイ語で「フラの指導者」の意。
- (7) 当該論文 [軽部 2015] では、フラの真正性の境界の形成を、サンフランシスコを拠点に活動する伝統的なフラ実践者たちの語りを事例に考察し、サンフランシスコの伝統的なフラ実践者たちにとって、彼らを「非真正」なフラから差異化する境界は「真正な智」であり、必ずしもハワイの土地や環境がフラの真正性を形成しているわけではないと考えていることを明らかにした。それにより、文化をめぐる真正性は、必ずしも起源とイコールになるものではなく、文化をとりまく環境の変化によって、様々に変容し、発展していくものであるという議論の萌芽を提示した。
- (8) ハワイ語の歌詞はPBS HPより引用、日本語はHP上で併記されている英語訳を筆者が日本語訳した。スペルや表記記号はPBS HPのママ引用している。

〈参考資料〉

軽部紀子

2015 「『真正なフラ』と『非真正なフラ』をめぐる境界の形成：カリフォルニア州サンフランシスコのフラ指導者の語りを事例として」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第4分冊 61, pp 143-157.

竹村初美

2002 「ハワイ先住民運動における神秘的言説—近代的条件に依拠した反近代主義」『東京大学宗教学年報』20, pp 139-154.

2004 「ハワイ先住民運動における生命と霊性の言説」『死生学研究』3, pp 127-148.

Hall, Lisa Kahaleolo

2005 “Hawaiian at Heart” and Other Fictions. *The Contemporary Pacific*, Vol. 17(2), pp 404-413.

Herman, RDK

1999 The Aloha State: Place Names and the Anti-Conquest of Hawai‘i. *Annals of the Association of American Geographers*, Vol. 89(1), pp 76-102.

Hobsbawm, Eric, and Terence Ranger, eds.

1983 *The Invention of Tradition*, Cambridge: Cambridge University Press.

Hong, Cesily

2013 (Doctoral Dissertation) The Power of the Hula: A Performance Text for Appropriating Identity Among First Hawaiian Youth. University of San Francisco.

Imada, Adria L.

2004 Hawaiians on Tour: Hula Circuits through the American Empire. *American Quarterly*. Vol. 56(1), pp 111-149.

2011 Transnational Hula as Colonial Culture. *The Journal of Pacific History*, 46(2), pp 149-176.

2012 Aloha America: Hula Circuits Through the U.S. Empire, Durham and London: Duke University Press.

Kauanui, J. Kēhaulani

2004 Hawai'i in and out of America. *Mississippi Review*, Vol. 32(3), pp 145-150.

2007 Diasporic Deracination and "Off-Island" Hawaiians. *The Contemporary Pacific*, Vol. 19(1), pp 137-160.

Keesing, Roger M.

1989 Creating the Past: Custom and Identity in the Contemporary Pacific. *The Contemporary Pacific*, Vol. 1(1 & 2), pp 19-42.

1991 Reply to Trask. *The Contemporary Pacific*, Vol. 3(1), pp 168-171.

Lili'uokalani, Queen of Hawai'i

2014 *Hawaii's Story by Hawaii's Queen*, Honolulu: Mutual Publishing. (第14版 (初版1898年))

Linnekin, Jocelyn

1983 Defining Tradition: Variations on the Hawaiian Identity. *American Ethnologist* 10, pp241-252.

Mattos, Jodie

2015 Hawaiiana in 2014: A Bibliography of Titles of Historical Interest. *Hawaiian Journal of History*, Vol. 49, pp 223-235.

Nihipali, Elizabeth,

2012 *Hawaiians in Los Angeles*, Charleston, S.C.: Arcadia Pub.

Pukui, Mary Kawena,, Elbert, Samuel H.,

1971 *Hawaiian Dictionary: Hawaiian-English, English-Hawaiian*, Honolulu: University of Hawai'i Press.

Rohrer, Judy

2010 *Haoles in Hawai'i: Race and Ethnicity in Hawai'i*. Honolulu: University of Hawai'i Press.

Stillman, Amy Ku'uleialoha

1996 Hawaiian Hula Competitions: Event, Repertoire, Performance, Tradition. *The Journal of American Folklore*, Vol. 109(434), pp 357-380.

1999 Globalizing Hula. *Yearbook for Traditional Music*, Vol. 31, pp 57-66.

Trask, Haunani-Kay,

1991 Natives and Anthropologists: The Colonial Struggle. *The Contemporary Pacific*, Vol. 3(1), pp 159-167.

1999 *From a Native Daughter: Colonialism and sovereignty in Hawai'i*, Honolulu: University of Hawaii Press.

※以下、いずれもインターネット資料は2016年8月24日最終閲覧。

Department of Hawaiian Home Lands ("DHHL")

"Hawaiian Homes Commission Act"

http://dhhl.hawaii.gov/wp-content/uploads/2011/06/HHCA_1921.pdf

Kamehameha Schools

He Inoa No Pauahi,

http://kapalama.ksbe.edu/elementary/mele/he_inoa_no_pauahi/he_inoa_no_pauahi.php

Pauahi's Will

http://www.ksbe.edu/about_us/about_pauahi/will/

Kūlia i ka Pūnāwai

<http://www.punawai.org/>

Nā Puke Wehewehe 'Ōlelo Hawai'i

<http://wehewehe.org/>

Nupepa

The Kamehameha Students Come Together for the Day of Pauahi

<https://nupepa-hawaii.com/tag/he-ino-no-pauahi/>

Public Broadcasting Service (“PBS”)

Hula Beyond Hawai'i: Overview: More About Hula

<http://www.pbs.org/pov/americanaloha/more-about-hula/3/>

The Esoteric Curiosa

“A Traveling Kamehameha” Princess Bernice Pauahi Does The Grand Tour of Europe

<http://theesotericcuriosa.blogspot.jp/2010/08/traveling-kamehameha-princess-bernice.html>

The Office of the Law Revision Counsel (“OLRC”)

United States Code

<http://uscode.house.gov/view.xhtml?req=granuleid:USC-prelim-title20-section80q-14&num=0&edition=prelim>

United States Census Bureau

U.S. Department of Commerce Annual Estimates of the Resident Population by Sex, Race Alone or in Combination, and Hispanic Origin for the United States, States, and Counties: April 1, 2010 to July 1, 2015

<http://factfinder.census.gov/faces/tableservices/jsf/pages/productview.xhtml?src=bkmk>